

みんなでやろう「生活防災」 パート3

毎月くどいようですが、**生活防災の基本は、自分の「できること」「関心のあること」からはじめることが大切!**そろそろお判りいただけただしょうか?



さて、お花見シーズン到来で、防災に関わる人たちの中では非常によく知られている逸話があります。「土手の花見」というお話です。

毎年春一番が吹き、関西地方では、奈良東大寺のお水取りが終われば、春到来と言われている。すると私たち日本人は春の香りに誘われるように思いつくことがあります。



それは「お花見!」。お花見と言えば「さくら・桜」。川岸の土手に植えられている桜並木を思い浮かべる人が多いでしょう。でも、なぜ川の土手が多いのでしょうか?この話には防災と実に大きな関係があるのです!



お花見は大体が「春」です。季節で「春」の前には「冬」。冬の川の土手は、寒風に吹きさらされたり、降霜や氷結の作用によって、土手の土は凍てつきます。その凍てついた土手は、

春になると溶け始めます。その溶けたあとの土手に、無数の素穴ができてしまい、土手は非常に「弱体化」します。そして季節は「梅雨」になり、弱体化した土手に梅雨期の特徴「河川の増水」をむかえることとなります。増水が度重なると、土手が決壊してしまい、その土手を毎年補修したり造り直したりを、繰り返さなければならなかったのです。

土手の決壊を防止するために仕組まれたのが「土手の花見」というイベントなのです。増水期をむかえる前に、大勢の人を集めて、緩んだ土手を踏み固め



るといふ、土手にとって必要なメンテナンスの方法を考え出したのです。しかし、**ただでは人が集まらない!**ことは、今も昔も変わりません。「災害防止の為にみんなでやろう」と掲げても、人はなかなか集まりません。それはなぜか?「そんな方法でうまくいくのか?」と疑問に思う人や、「私が参加しなくても誰かがしてくれるだろう」また、「沢山の人が参加するなら、私一人ぐらい行かなくても大丈夫だろう」などと思ってしまうのが人の常なのです・・・。

「土手を踏み固める防災イベントの日」には、ほとんど人が集まらず、増水期にやはり土手が決壊してしまう。では、「どうすればよいのか?」と知恵のある人が考えました。桜を土手に植えて、増水期が来る前に土手で「お花見というイベントをやろう」と考えたのです。しかし、「お花見だけでひとは集まるのだろうか?」そこで考え出したのが「お花見に来て、みんなで楽しく一杯飲みながら美味しいものを食べよう」という試みでした。楽しいことにはみんな興味があります。ましてや「歌って、踊って、楽しくみんなでどんちゃん騒ぎ」をすると「土手を踏み固める防災イベント」には参加しなかった人たちが、我も我もとこぞって参加するようになりました。さらには、毎年繰り返し行うことで、その地域の人たちだけではなく「お花見イベントの輪」が広がり、イベントを打ち出さなくても毎年春になると、どこからともなく沢山の人が土手に集まるようになったのです。「土手を踏み固める防災イベントの日」に「楽しさ」を加え「お花見」と名前を変えたことにより「春の防災イベント」は大成功し、今となっては言葉が**ひとり歩き**するようになりました。

これが毎年みなさんのワクワクする「お花見」の発祥のひとつだと言われています。



土手の多くがコンクリートで護岸化された近年、「どこまで有効なのか?」「植樹によって土手の強度に悪影響を及ぼす」等いろいろな意見もあります。しかし注目すべき点は、「土手のメンテナンス」という防災上の活動と、「お花見」という娯楽的な活動です。人々が進んで参加しようと思える活動とを、巧みに重ね合わせた「土手の花見」というイベントです。防災という、参加しにくい社会的に必要な活動を成功させるために、「土手のメンテナンス」を日々の活動から孤立させないで、日常生活の延長線上に置いた素晴らしい活動のひとつです。

防災は一人よりも二人、二人よりもチームでやることこそが、防災を継続するための秘訣です。

私たちのコンセプト「**防災を防災と語らずとも防災の役割を果たすこと**」。これが究極の「生活防災」です。みなさんも、**生活防災の醍醐味**のひとつ「**土手の花見**」をしてみませんか?

そこから新たな「生活防災」を、あなた自身が見つげ出すことができるかも知れませんよ。

あなたとあなたの大切な家族を守ることができる、独自の防災・減災活動を考えましょう。



今年もグリーンシティの西側の土手には、グリーンシティの人々が植えた「桜」が咲きました。

(参考引用文献: 生活防災 のすずめ

矢守克也教授著)